

らずして歐州大戦乱に遭遇し、隆々たる島内経済の引続く發展と共に當行の活躍は愈々目覺しいものとなつた。

第三期——整理期

例えは大正四年には再び倍額増資して一千万円としたが、七年四月には保証發行の限度を倍増して二千万円となした。然も翌八年九月には更に三千万円を増資して五千万円とし、以つて、資金需要の増大に応じている。

これを営業成績に就いて見ても次表の如く、預金は四十二年の一千七百万円より大正七年には三億九千万円に激増し、貸出高も、二千八百万円より四億五十七百万円と言う目覺しい増加を示しているのである。

然も、同表に明なく、貸出は島内に於いても著増しているが、特に海外及び内地に対する部分が急激に増加している。これ言つまでもなく、大戦を契機として内地経済及貿易の急速な發展と、同時に南洋其の他の国外投資の旺盛となり、資金の需要が大いに喚起された結果である。

貸出及預金推移表（単位千円）

	貸出高		預金 計
	島内	海外	
明治三十二年	二、六〇四	—	七七〇
四十二年	一七、五五九	一、〇五一	七、七六一
大正元年	二六、五三三	三、八六二	一四、二三二
七年	七六、三〇一	一四、一〇四	二三八、八六六
			四五七、二七一
			三八九、二〇一

斯くてこの期間に於ける當行の業績は極めて良く、利益は明治四十二年の九十六万八千円より、大正八年には五百二万余円に増大して一年割の恒常配当を行つてゐるのである。

行詰り、昭和二年四月内地支店の休業となり、同十一月には政府の意向を汲んで三分の一減資を行う破目に陥つたのである。即ち、四千五

百万円の資本金を一千五百万円とし、新旧各三株を一株とし、この差益二千六百二十五万円と、積立金百九十万円を併せて損失補填金とする同時に日銀より融資を迎ぐこととなつたのである。

第四期——回復期・発展期

と同時に、将来内地に於ける貸出は之を抑制し、コールの吸收を止め、不要な支店、出張所の廃合等種々整理を実行するに至つた。現にコールマネーの如きは既に昭和三年末には僅に百八十万円と、同年末の五千三百万円に比較して著しい減少を示してゐるのである。

其の他滯貸整理に於ては鈴木商店を筆頭に其の他の分に対する整理も順調に実行され、然も臺灣銀行融資法による巨額な日銀借入金も昭和三年六月の損失審査会に於て全額政府補填となつた為、焦付債権の銷却が行われ、斯くて資産内容も面目を改めるに至つてゐる。

尤も、其の後、財界は政府のデフレ政策と世界経済の不況に災いされて沈滯裡にあり、資金需要は増加せず、債権の回収も思うに委せぬと言ふ訳で當行の業績も余り香しいものではなかつた。が、期末、金再禁止の行われた昭和六年下期には兎も角、五分一厘二毛の利益率を維持していたのである。

が、七年度に入り、如上金再禁止の恩恵により、財界が急テンポな回復を示すと共に當行の業績も漸く好化するに至り、同上期には久方振に三分配当を復活するに至つた。其の後も、一路向上的途を辿り、利益金は次の如く増大しており、一時は更に二分程度の増配まで噂に

上る様になつた。

累期業績表（単位千円%）

	六年下	三三六	五、一	純利益金	利 益 率	配 當 率
				六年上		
七年上	四二六	六、四	三、〇	同 下	四九五	七、六
八年上	五六五	八、六	三、〇	同 下	五七六	八、七
九年上	六三一	九、六	三、〇			

然も、この計上利益は相当調節されている筈である。例えは八年上期決算に就いて見ると同年五月末に売出された帝人株の処分益は全く計上されていない。同株式の売出は十万株売値百二十五円であつたから、仮に帳簿価格を五十円としてもこれで、七百五十万円の処分益が挙つた筈である。これは、蓬萊不動産会社へ整理を委託してある往年の鈴木関係貸付に対する担保流れ不動産の価格銷却に振向けたのであるが何れにせよこの利益を加えると同期の利益は八百万円と云う膨大なものとなるのである。

然も、鈴木系から受け継いだ大日本塩業、昭和、新竹沙糖、台東の四製糖会社及び神戸製鋼の担保流れボロ株も一齊に値上がりを來してゐるし、貸付金にしても對合同油脂、塩水港製糖、及び東亜煙草等、鋼株も売出したが帝人株と同じく可成りの利益が挙つてゐる筈であるがこの処分益も計上していない。

併し、これ等の諸要素はその個当社の内容を良くするものであつて、

右の如き目覚しい發展は略大正十年迄繼續したが、既に九年に比較して多少とも伸展のテンポを阻止されている。と言うのは、九年大戦の終了により財界が漸く反動期に入った為である。然も、翌十一年には又は損失に帰する部分を生ずるに至つた。然も他方、預金は引出され激減した。斯くて當行はコール其の他借入金により一時を凌ごうとしたが、遂に力及ばずより根本的な整理の余儀なきに至つたのである。即ち、勸銀及び東拓に不動産担保の固定貸付の肩代りを依頼すると共に、同年五月には預金部より三千万円、日銀より旧来の一千万円の外に五百万円を借り受け、然も同年下記決算以降は従来の一割配当を七分に低下することとなつた。

然るに、不幸にも、翌十二年関東大震災に遭遇し回収不能の債権が統出する上、担保物権の値下りで新に担保切れとなつたものが出てゐる。様で更に第二段の整理を余儀なくされた。即ち、十四年八月には回収不能と目された二千八百六十万円を資本金四分の一減、並に欠損補填準備金及び特別積立金取崩し等に依つて補填した。この上、政府預金部より融通された五千万円、利率五分を二分に、及び日本銀行よりの為替資金二千万円、利率五分を同じく一分に引下げて貰つた。

が、運の悪い時は仕方のないもので、整理の効果が未だ現れぬ昭和二年には大貸付先たる鈴木商店が破綻し、約三億円の債権は回収不能となるに至つた。之が為に當行へコールを放出していた各銀行は一斉に回収し、従つてこれ等のコールで金融操作を行つていた當行は忽ち

この点、茲一二、三期間の資産構成の推移を見れば明である。

資金構成表（単位千円）

	七年上期	八年上期	九年上期
払込資本金	一六、七八一	一七、〇六〇	一五、八二九
銀行券	五一、六二〇	四三、一三三	四七、九五四
諸預金	九一、二五二	九〇、三〇三	一〇一、四七二
合計	一六〇、六五三	一五〇、五九六	一六五、二五五
政府借入金	九〇、二九一	八九、三七九	七七、五二四
コールマネー	四、八〇〇	二、五五〇	四、九〇〇
再割引手形	八九、九一〇	六〇、六二八	三六、三七九
合計	二二五、二七六	一七三、六三八	一五七、七五三

即ち、問題の特融借入金は漸減して九年上期には七千七百余万円と八年上期に比較して一千二百万円を激減している。尤も借入金、コールマネーは大分増加しているが、再割引手形は実に二千四百万円を著減しているので結局、八年上期に見られた如く運転資金の半以上を外部負債で賄つてゐると言う非難は解消する様になつていて。

他面、同表に明な様に預金を内地銀行並に増加に転じてゐるが、これも、金融恐慌当時の悪人気が漸く薄れて當行の信用が回復した一証左と見て大過あるまい。

然も、最近は台湾内に於ける各種事業は等しく活況を呈し、新事業の計画されるものあつて當行の地位は益々重要性を加えつつあり、資金需要に応ずる為に目下保証準備発行の拡張が議題とされている。

——台湾銀行は鈴木商店の主力銀行であり、当小史に鈴木商店に関連する興味ある文面がありますので転載させていただきました——編集室より

鈴木治雄会長は、平成二十年九月三日に九十歳以上の県内在住者で、長年にわたり社会貢献され今も活躍している人に贈られる「高齢者特別賞」の表彰を受けられました。
写真は、鈴木会長が井戸敏三兵庫県知事より表彰状を授与されているところを神戸新聞に掲載されました。



辰巳会ゆかりの祥龍寺の歴史（その三）

（たつみ誌70号よりの続き）

菅應峰

略歴その他は一切不明である。

古い石碑は現在、次の六基が残つていて。

- 湛州澄和尚（年代不明）
- 天庵篤宗和尚（安政三年寂）
- 本石淨基和尚（）
- 徹翁宜參和尚（）
- 一得淨玄和尚（）
- 得翁元和尚（）

かるうじて名前は判読出来るが、五基の年代はいずれも不詳である。

「西摂大觀」に「祥龍寺址・宝塔卵塔數を列ね、中には蒼苔面」に蒸して風雨千古の佛を留めしものあり」と書留めてある宝塔卵塔は、昭和の再建後、どういうわけか現在の八幡墓地に移され、昭和十三年の水害の折、悉く流出したと云う。これらの墓は若林家のものであるが、中に歴代和尚の墓もあつたそうである（乾後次氏談）。因みに祥龍寺唯一の古墨跡に、祥龍默堂の名があるが、年代は不明。

前述の即宗和尚、鉄禪和尚、覚玄和尚、篤宗和尚、湛州澄和尚、淨基和尚、宜參和尚、淨玄和尚、德翁玄和尚、默堂和尚はいずれも「禅宗法系譜」に名は無く、今後時期を見て「黄檗宗宗派図」を調べて見たい。

このようにして祥龍寺は荒廃無住のまま、明治維新を迎えて、排仏棄釈の波をこうむつてやがて完全に廃寺となつて、土地まで他人の手に渡つてしまふのである。

宝積寺光雄和尚の口伝えによれば明治までは宝積寺から弟子の何人かが輪番で祥龍寺を留守していたと云われる。祥龍寺墓地に「天庵篤宗和尚」の石碑があり、安政三年寂（一八五六年）と刻まれている。竹堂和尚兼務の後、祥龍寺で亡くなつた和尚とすれば歴代住職でもなく

碧層軒五葉愚溪老師。諱は忠忠。安政六年八月十四日豊後国南海部